

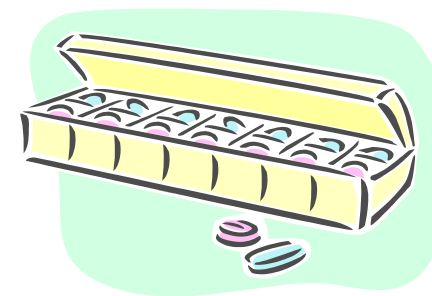
(レスキュー)



レスキューの基本



- レスキューとは ベースに使用している鎮痛薬の不足を補う目的で鎮痛薬を追加投与すること
- オピオイドを定時使用している場合には、必ず急な痛みの悪化(突出痛)を予測して、レスキューを用意する
- 今、感じている痛み(突出痛)を取り除く目的で使用するため、速効性の薬剤を準備し、使用する

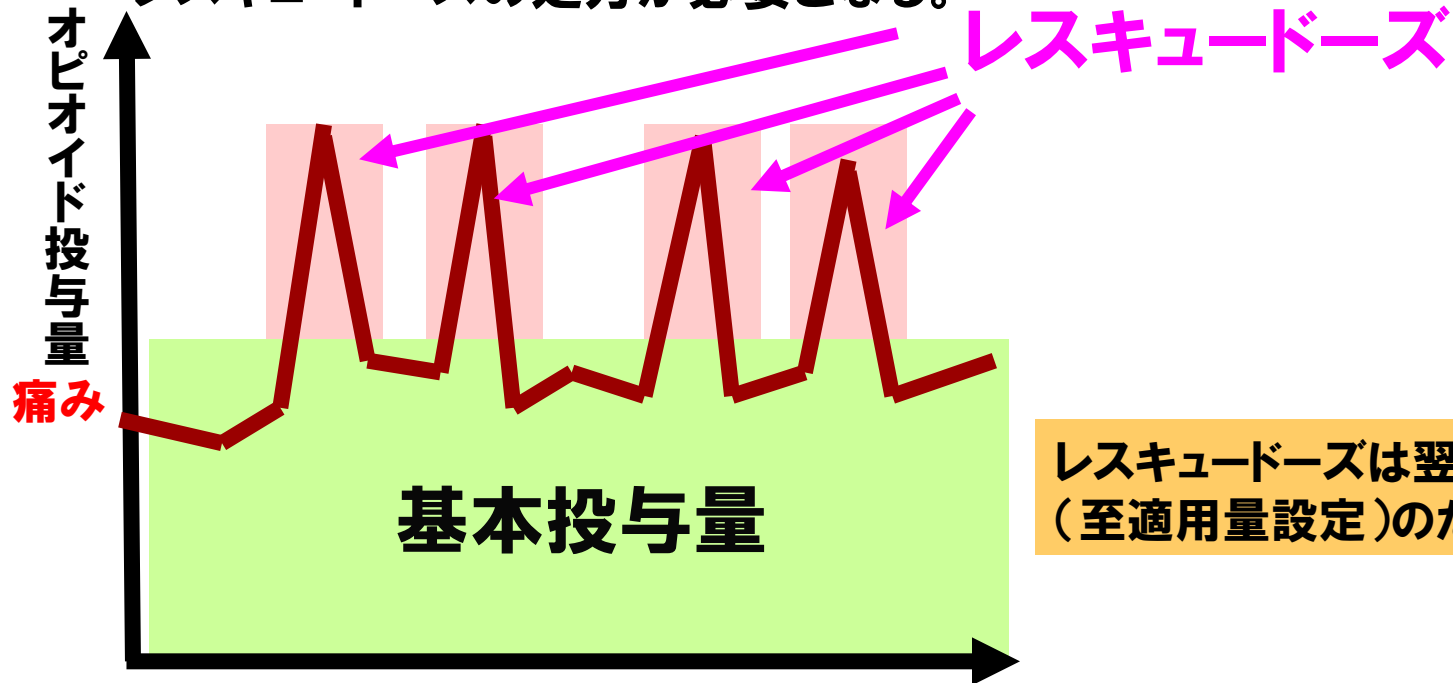


突出痛の種類

		体性痛	内臓痛	神経障害性疼痛	対処法
予測可能		体動時痛	嚥下・排尿・排便時	体動による神経圧迫、アロディニア	<ul style="list-style-type: none"> ・痛みの出にくい動作方法 ・環境設定、コルセットの装着 ・予防的レスキュー、痛みの病態に応じた薬剤
予測不可能	不随意的誘引がある	不随意的体動による痛み (ミオクローヌス、咳など)	蠕動痛、膀胱痙攣など	不随意的体動による神経圧迫	痛みの病態に応じた薬剤
	誘引なく生じる	何の誘引もなく生じる発作痛			鎮痛補助剤が必要となることが多い
定時鎮痛薬の切れ目の痛み		鎮痛薬の薬効の切れ目に出現する痛み			定期鎮痛薬の増量

レスキュードーズについて

疼痛コントロールが得られていた患者さんで突出痛が出現した場合はレスキュードーズの処方が必要となる。



レスキュードーズは翌日からのタイトレーション（至適用量設定）のための重要な指標である。

- 痛みが緩和せずに眠気や吐き気がない場合には、以下のような間隔で使用できる
 - 経口からのレスキューは、1時間毎
 - 静脈からのレスキューは、10～20分毎
- レスキューは、いつでも使用できる
 - 例えば、次の定時薬服用時間の少しまえでも痛みが強くなっていれば、服用しても良い
- レスキュードーズの1回量は、定時服用している薬の1日量の1/6量が目安となる
- 効果と副作用をアセスメントして1回量を調節することもある

レスキュードーズに使用するオピオイドの条件

・レスキュードーズには定時投与されている徐放性オピオイドと**同一成分、同一投与経路の速放性オピオイド**を使用する。

その理由は・・・

① 確実な鎮痛効果を期待できる

突出痛は持続痛と同じ種類の痛み(発症部位と性質)であることが多いので、持続痛をコントロールしている定時投与オピオイドと同じ種類のオピオイドを使用することで、突出痛に対しても確実な鎮痛効果が期待できる。

② 安全性が高く、副作用にも対処しやすい

定時投与オピオイドの安全性はすでに確認されているので、同じ種類のオピオイドであれば安全に投与できる。万一副作用が発現した場合も同じ種類のオピオイドであれば対策を講じやすい。

③ レスキュードーズ1回量の計算が容易である

同一成分、同一投与経路のオピオイドであれば、レスキュードーズの1回量を定時投与オピオイドの一定量比として簡単に計算できる。また、レスキュードーズを定時投与オピオイドの投与量に反映させやすい。

レスキュードーズに関する留意点

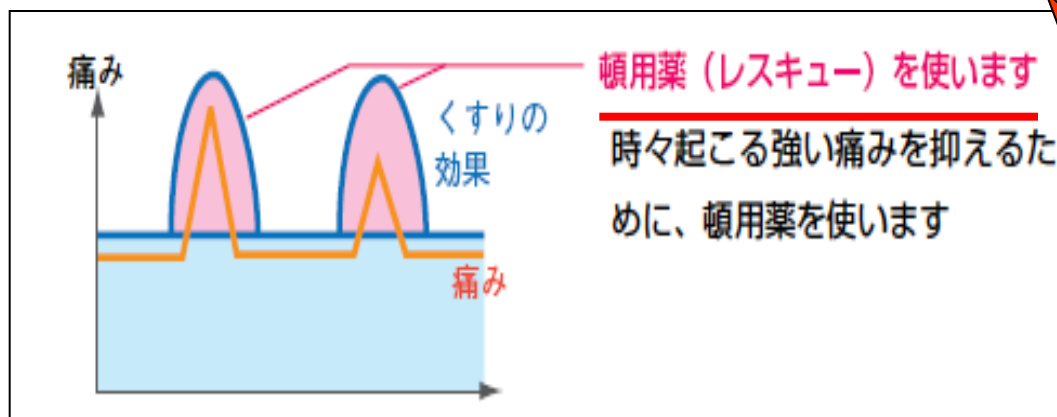
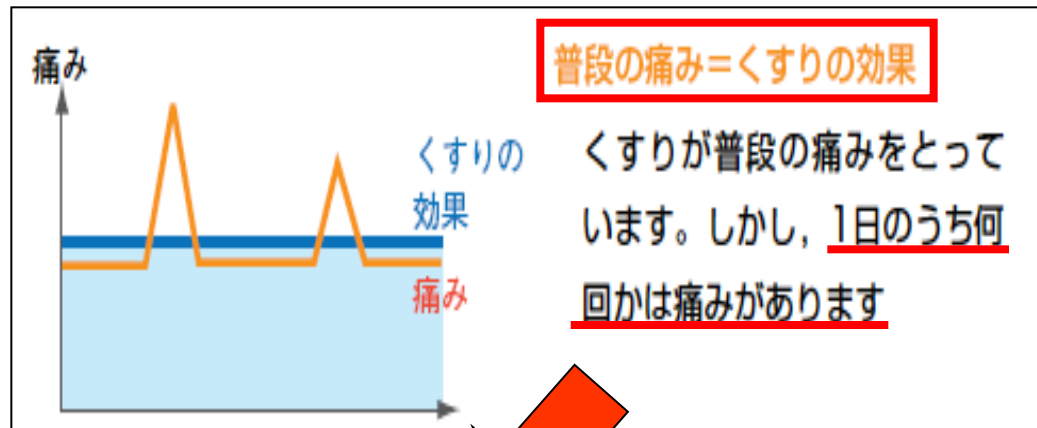
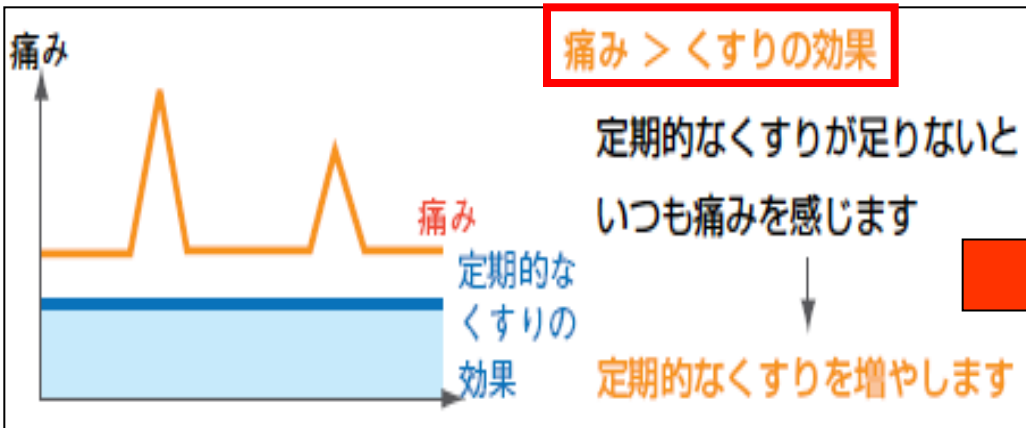
レスキュードーズを翌日からの投与量に反映させる方法

例

- レスキューで投与したオピオイドの全量を追加する方法
- 全オピオイド投与量の75%を翌日からの投与量とする方法
- 基本投与量+レスキュー量の50%を翌日からの投与量とする方法

患者さんの痛みの状況に応じて、レスキュードーズをタイムリーに翌日からの投与量に反映させることが重要である。

定時薬とレスキューの使い方



(定時薬を増やすと・・・)



レスキューの効果判定(痛みと眠気の評価)

痛み(ー)	眠気(ー)	レスキューは効果十分 レスキューを積極的に使用。 突出痛の種類と病態をアセスメントし対処する。
	眠気(+)	レスキュー用量が過量 レスキューの投与量の減量を試みる。
痛み(+)	眠気(ー)	レスキュー用量が不足 レスキューの投与量の減量を試みる。
	眠気(+)	レスキューの効果が期待できない 現在使用している薬剤では鎮痛効果が期待できないため、病態に応じた他の薬剤、対応方法を検討する。

レスキューの評価によって対処方法が変わる